

## 『HIROSHIMA 1958』の視線

中原豊

エマニュエル・リヴァの写真集『HIROSHIMA 1958』を手にすると思議な思いにとらわれる。そこに写し取られた一九五八(昭和33)年九月の広島姿があまりに明るく健康的なのだ。それは虚を突かれたという感じに近い。今までの自分の感覚や思考に、いかに余分な力が入っていたかに気づかされるのである。

リヴァは映画「Hiroshima, non amour」(邦題「二十四時間の情事」)の主演女優で、この映画の撮影のために広島を訪れ、仕事のあいまに撮った44枚のモノクロ写真をまとめたのが『HIROSHIMA 1958』である。

リヴァが演じるフランス人女性のヒロインは、復興期の広島で出会った日本人男性と短くも激しい恋に落ちるのだが、そこにドイツ占領下にあったフランスのヌヴェールでドイツ兵と恋に落ちた同国人の迫害にあったという過去が重ねられる。広島悲劇とヌヴェールの悲劇を安直に同化させようとしたわけではない。冒頭の二人の会話が象徴的だ。「私はヒロシマを見た」と繰り返すフランス人女性の声を、「君は何も見ていない」と日本人男性の声が執拗に否定するのである。

その声に反発するように撮られた写真という解釈もどうやら成

り立たない。それくらいリヴァの写真は明るく屈託がない。被爆後十三年を経た広島市内の街並は、まだまだ土が剥き出しになった道や安普請の木造家屋が多いとはいえ、復興の力強さを感じさせる。人々の身だしなみも清潔で整っている。子どもたちの見える表情は無邪気で明るく、大人たちは黙々と日々の仕事に勤しんでいる。

平和記念公園の情景もあるが、そこには花嫁姿の女性の後ろ姿がある。原爆ドームも原爆の子の像も写っているが、それらはたとえば建設中の広島市民球場の照明灯と等価なのだ。意図的に被爆の爪跡を避けた感じは微塵もなく、すべてがあるがままに撮られているという印象を強く受ける。

この写真集の存在を私に教えてくれたのは、建築写真家の山岸剛氏だった。建築学会関東支部のイベントとして、谷川俊太郎氏を招いてこの写真集をテーマとしたトークセッションを行いたいと相談を受けたのである。その実現にささやかながら協力した縁もあって、学会の会場で山岸氏や谷川氏がこの写真集について語るのを聴いた。そこで繰り返し語られていたのも、リヴァの視線に何の偏見も先入観もなく、ヨーロッパの伝統の重みのようなものを感じさせないことだった。

一方、写真集に収められたインタビューの中で、リヴァはこう語っている。

広島で起こったこと、あの悲劇は、記憶の中にとても強く残っているし、それが私にしみ込んでいたのに違いありません。歴史だけではなく、映画のストーリーも私の中に深く入

り込んできていました。私はシナリオとともに生き、撮影の間はその物語は片時も離れることはなかったのです。

そんなリヴァアにとって、広島を撮るという営みは決して映画撮影の重圧から逃れるためのものではなかった。「私は目に入ったものを撮っていたのです」「そこにあつたものしか撮っていないのです」というリヴァアの姿勢は、脚本を書いたマグリット・デュラスの描いたストーリーと監督アラン・レネの演出を奥深くまで浸透させた精神が、被写体である広島に対して真摯に向き合い最大の敬意を払った結果なのだろうと思う。

何かを見る時に、人はそこに自分が見たいと思つているものを見ようとする。あるいは、見たくないと思つているものを見るまいとする。それはほとんどの場合無意識に為されるから始末が悪い。固定観念を離れ、虚心にもものを見ることは本当に難しい。ヒロシマを通して広島を写すのではなく、広島を通してヒロシマを写したリヴァアの写真はその稀有な一例である。

最後の一枚はリヴァア自身が被写体となつた写真である。撮影者は同行したシルヴェット・ポドロというスクリプターで、中央に牛乳瓶らしいものを両手に持ったひとりの少女が立ち、少し離れたところに明るい色に見えるスーツを着たリヴァアが立つ。場所は夜の広島駅前広場で、背景には広島百貨店の灯りが見える。少女は悲しげな目をして少し遠くを見ている。リヴァアはカメラを見て

いるが、その眼差しもひどく悲しげである。

他の43枚の写真には子どもたちがたくさん登場するのだが、いずれも外国人女性からカメラを向けられているというような緊張感がまるでない。リヴァアの使つていたカメラはリコーフレックスという二眼レフで、ファインダーが上部についていて撮影の時は上から覗き込む姿勢になる。そんな姿勢のリヴァアが子どもたちを撮影している情景を想像してみると、どこか微笑ましい感じがする。子どもたちは好奇の目を輝かせて、大型の重いカメラを操作して構図を決めピンントを合わせるリヴァアを見つめていたに違いない。

最後の写真には、そうした撮影者と被写体の幸福な関係が感じられない。お互いに手を伸ばしてもぎりぎり届かないような微妙な距離を隔てて、少女とリヴァアは立つている。二人の視線はまったく交わらない。

44枚の構成が誰の手によるものかはわからないが、この写真が最後にあることで、写真集全体のもつ意味もさらに深まつていくように感じる。撮影者であるリヴァアと被写体である広島との親密な関係はここで一旦断ち切られる。その関係が固定観念と化してしまふことを戒めるように。それは映画の冒頭の男女の会話に遠く呼応しており、写真集を見る者に自らの視線を問い直すよう促しているようだ。